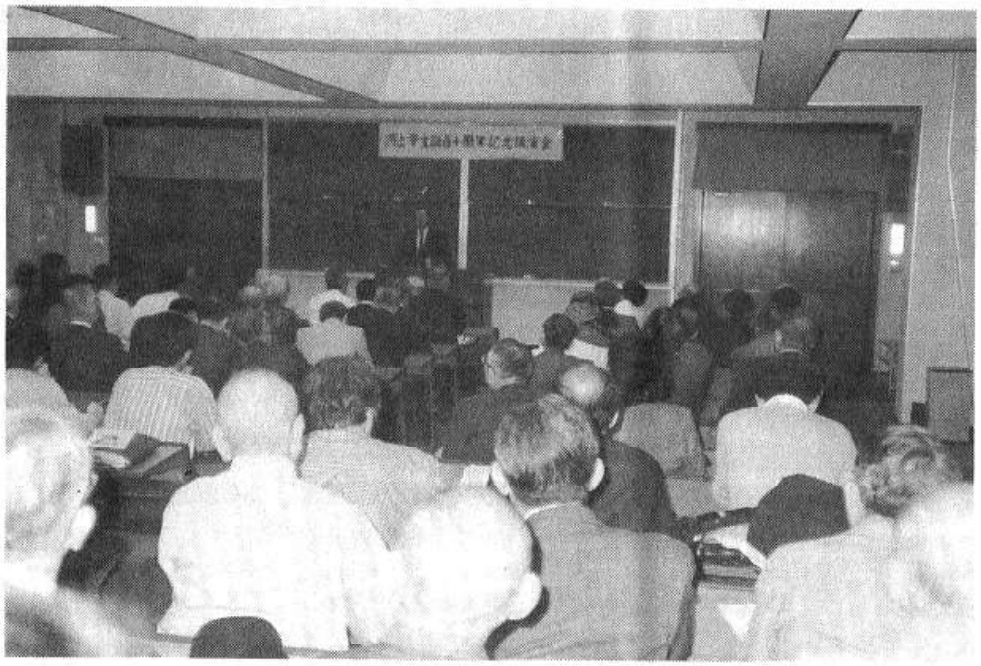
ISSN 0286−1968

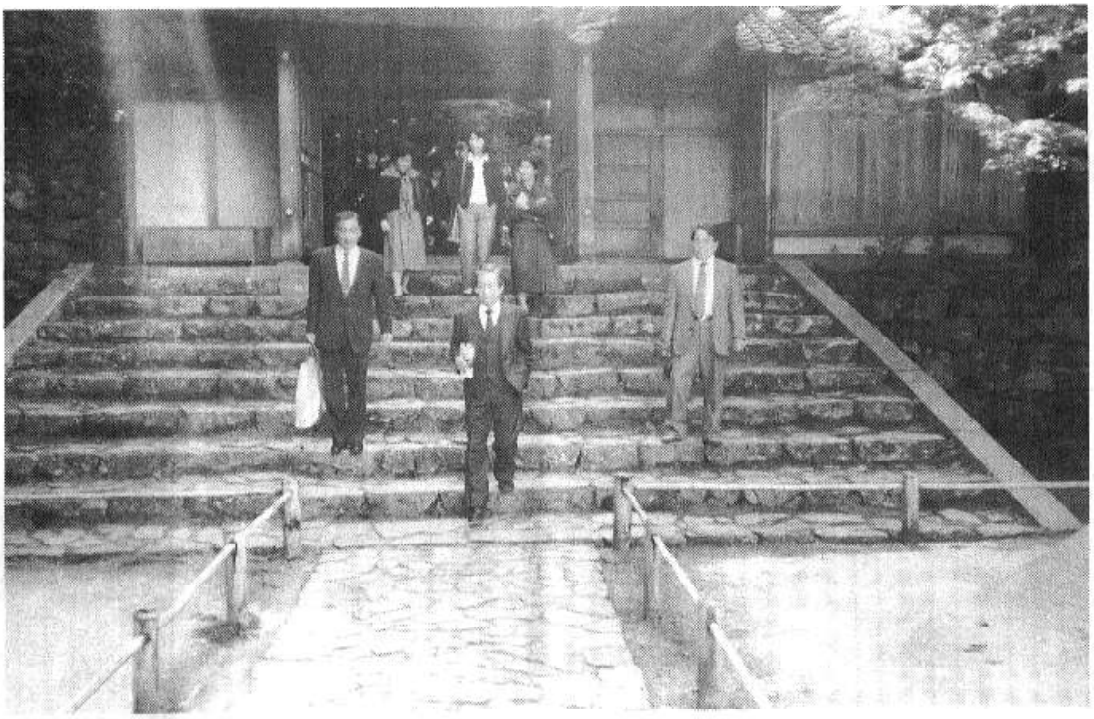


河上肇紀念会会報

NO. 34

1990・1・30

河上肇生誕百十周年記念特集 I



目次

河上肇と私 ……小田正大 (1)

『全集』以後（八）……杉原四郎 (3)

特集・河上肇生誕百十周年記念Ⅰ ……(9)

記念行事記 ……紀平龍雄 (10)

会員通信 ……(13)

編集後記 ……(19)

河上肇と私

河上肇記念会には昭和五十九年からお世話になっている者です。河上先生について私に教えて呉れたのは弟であった。弟は京都の経済学部ゼミナーでマルクスを学んでいた。

昭和三十一年十一月京大文化祭に弟につれられ見学した際、京大に河上先生という偉大な先生が居られた。墓が善気山獅子谷法然院にあるのでお参りに行った。その時の記念に撮った先生墓碑・歌碑の写真を私はアルバムに貼っている。

当時秀夫人の墓碑名には朱が入れてあり御健在でいられるのを知ったしだいである。歌碑の写真に説明として

たどりつきふりかえりみれば　山川を
越えては越えて　来つるものかな

と記している。後日正しくは

多度利津伎布理加幣利美札波山川遠
越而波越而来都留毛野香那

と知った。早速自叙傳（岩波書店版）を購入し読み大いに感銘を受けたものです。その後大阪古本屋天牛書店で世界評論社版の自叙傳を発見した時は、又も先生にめぐり合った感を受け買い求め大切にしている。

表紙をめくると昭和三十三年十一月十七日付の朝日新聞の切抜きが差込んである。

故河上肇博士の選集
ソ連で出版決る
ロマノフ氏、未亡人訪問

河上肇博士の選集がソ連で出版されることになった。この翻訳出版の責任者であるモスクワ大学歴史教授、ソ日協会理事A・N・ロマノフ氏は、ソ連親善使節団に加わって来日しているが、十六日正午ごろ京都立命館大学を訪ね、総長室で河上博士未亡人（七三）＝京都市左京

小田正大

区上大路町＝と、博士の義弟に当る末川博士立命大総長に会った。ロマノフ氏の方から特に面会を申入れたものである。……に立命大に河上博士未亡人秀さん（中央）を訪ねたロマノフ氏（左）と末川総長と写真も掲載されている。

河上肇先生が服役満期を全うされたのは先生の強い信念と共に、秀未亡人の大いなる力によるものであろう。

留守日記

―冬の時代に耐えた妻の記録―

河上　秀著　筑摩書房　がある。

同書については昭和四十三年五月朝日新聞に私のすすめる十冊　評論家　寿岳しづさんが

暗黒時代の日常記録として・・・

獄中の夫との対話、色々なビジネス、さまざまの家事、父と同じ思想のゆえに官憲に追われている娘を案じる母心、そして四季の移りかわり。そうしたものを記してゆく筆はさびしく柔らかに、時には控え目ながらきりきりとしたひきしまり、一人の日本の女性の世界を描き出しています・・・

すぐれた日記を残した平安朝の女の姿勢もしのばれ、味わい深い本となっています……とありました。

河上先生夫妻の歩まれた道・その生きざまには、苦難を乗り越えられた後の何ものにもとらわれる事のない、すがすがしさに大いなる魅力を感じています。

河上肇先生を知った事により私にも強く生きる力となっている事を感謝している。

（会社員）

河上肇記念会会員出版物

（一九八九年一月以降、事務局へ寄贈されたもの）

・松本倉吉（故人）「愛鷹山麓に結ぶ夢―解放運動老人協同ホームの歩み」（中に「河上肇先生に出会う」の一稿あり。沼津市西椎路七五八　老人協同ホーム内松本　栄　非売品）

・旭　季彦「ラプソディ　オブ　チェーホフ」（中に「河上肇とチェーホフ」の一稿あり　武蔵野市吉祥寺三―二一―二　定価二、三〇〇円）

『全集』以後（八）

杉原四郎

一

一九二八年から同三二年にかけて改造社から出版された『経済学全集』は、いわゆる円本時代の代表的な出版物の一つであるが、その「内容見本」は、いろいろの意味で興味深い。

B6版三二ページで多分一九二八年九月はじめに刊行されたこのパンフレットの主要内容は、（一）全四七巻のタイトルと担当者名、（二）全四七巻の内容の体系的な説明、（三）福田徳三をはじめとする八八の推薦文（河上は書いていない）である。（二）の中で、河上の担当する『経済学大綱』（第一巻）については、「職を賭して学に忠なる河上博士が、茲に始めて公にされる『経済学大綱』こそは、大学における博士三十年の研鑽の最終的結晶として、絶大の確信をもって自ら世に問はれんとするものである」とされ、また第八巻の『マルクス経済学の基礎理論』については、これは「斯学の第一人者として中外の均しく識認する河上博士の最高力作である。この一著は本全集をして九鼎大品の如く重からしむるもので、マルクス派経済学の根幹を説いて鬱蒼たるマルクス派の理論を闡明す」とされている。そしてこの二巻について河上自身が抱負を語る文章が以上の内容説明とは別におさめている。出版社がいかにこの二巻を重視しているかがこうした取り扱い方にあらわれているといえよう。

つぎに河上の二つの文章をかかげよう。

拙著『經濟學大綱』について

聊か誇大に失する嫌ひがあるけれども、他に適當な標題を見出しえぬために、假に『經濟學大綱』と題した私の著作は、上下兩篇から成り立ってゐる。上篇『資本家的社會の解剖』は、私の大學における最後の講義の原稿

に屬する。私の講義は、この最後のものを除き、その前々年度の分も、前年度の分も、共に印刷に附せられ、『非賣品』として賣買されてゐたけれども、それは私の校閲を經ざるものであり、且つ私の意思に反して賣買されてゐたものである。私が自分の責任において經濟學の基礎的理論に關する講義案を公けにするは、これが最初である。それは講壇における朗讀により學生諸君の筆記を期待した部分に屬する。筆記のあひまあひまに補足した説明は、今その原稿を十分に整理するの遑を有ちえない。それらは後日の補訂に讓る外ない。（中略）

下篇はブルヂョア經濟學の成立、發展、崩壞の過程を大觀したものであり、上篇はこれらブルヂョア經濟學の廢墟の上に成立した新興科學としてのプロレタリア經濟學—言ふまでもなく、それはマルクスを祖とする—の要點を究明したものである。（下略）

拙著『マルクス經濟學の基礎理論』について

まだ執筆してゐない此の書について、私は今確なことを語りえない。たゞ計畫だけを一言するならば、私はこの書の前半において、マルクス主義全體の基礎になってゐる世界觀と社會觀と—すなはち辯證法的唯物論と唯物史觀と—を論じ、後半においては、特にマルクス主義經濟學の基礎的諸理論を述べるつもりである。もし私の叙述が成效しえたならば、それは最も捨象的なものから次第に具象的なものへ向上することにおいて、『資本論』を根本的に把握するための重要なる準備作業を提供し、かくて最後には、精細を極めてをる『資本論』の諸理論の、最後の窮極目的に達するための、根本的な筋道の見通しを表示することにおいて、その局を結びうるであらう。これらの諸問題については、私はこれまで種々の機會に所見を發表して来たが、『經濟學全集』の刊行を機會に、これらを一纏めにしてそれに統一的な表現を與へたいと思ってゐるのである。

河上　肇

二

この二つの文章について、若干のコメントをしるしておこう。

『経済学大綱』には、一九二八年の八月卅一日という日付のある序があるが、内容見本の文章もほぼこれと同じ時に書かれたものと思われる。これと『大綱』の序とでは、内容的にことなるところはないが、内容見本の文

章が序の一部分をそのままとってきたものではなく、序とは別に書かれた文章であることは、両者を比較すれば明らかである。中略、下略とあるのは、河上の文章を全文のせるスペースが内容見本にないので、改造社の方で一部省略したことを示すものであろう。序でも河上は上篇「資本家的社会の解剖」を将来加筆したいとかいているが、内容見本の文章では、「後日の補訂」について、やや具体的に述べているところが注目されよう。

『マルクス経済学の基礎理論』は、一九二九年一二月に刊行されたので、内容見本の文章はそれに一年数ヶ月先立って書かれたものである。内容見本では、本書は「マルクス主義の世界観と社会観」、「マルクス主義経済学序説」の二つの部分からなるとされており、河上の解説もそうした構想を前提に書かれている。刊行された『基礎理論』も基本的にはその構想にもとずいているが、タイトルが上篇「マルクス主義の哲学的基礎」、下篇「マルクス主義経済学の出発点」という風にすこしかわっている。

『基礎理論』にも序がついているが、その序は、『大綱』の序とちがって、きわめて短いものである。したがって内容見本の文章は、河上が本書で何を書こうとしてかをわれわれが理解するうえに、序を補足するものとして、参考になるところがあろう。

『経済学全集』の内容見本は、この他にもわれわれの興味をそそるところがある。たとえば、それによると、第十、十一、十二巻は、『資本論体系』の上、中、下にあてられて、それぞれ『資本論』の第一、第二、第三巻を中心に解説されることになっており、執筆者には（上）河上肇、櫛田民蔵、（中）向坂逸郎、宇賀弘蔵、大塚金助、（下）向坂逸郎、山田盛太郎、有沢広巳の名前がしるされていた。だが実際に出たこの三巻の執筆者は、向坂逸郎が中心で、他に山田盛太郎と宇野弘蔵が担当し、河上肇、櫛田民蔵、大塚金之助、有沢広巳は書いていない。河上肇がおりたのは、『マルクス経済学の基礎理論』の下篇（それは『資本論入門』のはじめのところを収録したものである）と『資本論体系』（上）とが内容的にだぶることになるからとも考えられる。

三

全集には河上肇の講演（または演説）の記録がいくつかおさめられているが、それにはつぎの四種がある。

（一）速記録で、河上の校閲を経て公表されたものと、

経ずに公表されたもの、(二)草稿で、河上が公表したものと、全集ではじめて公表されたもの。

明治三十七年四月に創立された京都経済会は、毎月の例会での講演の記録を年一回まとめて公刊してきたが、私が川原竹一会員から借覧した『京都経済会講演集』第四号(大正五年三月、一七九ページ、他に会則と会員名簿など一四ページ)には、大正四年におこなわれた七人の講演が収録されており、その三番目に河上肇が五月二五日におこなった「時局に対する国民の覚悟」という講演の速記録がある(六三〜七九ページ)。同書の末尾に「本講演速記は校閲を経ざるものに付文責編者に在り」とあるが、この注記は最後の田尻稲次郎の講演だけでなく七人すべての講演に、したがって河上の講演にもあてはまるものと思われる。

この「時局に対する国民の覚悟」は全集に収録されていない。また大正四年五月二五日に河上が京都経済会で講演したことは「年譜」(全集別巻)に記されていない。それでこの講演の内容を紹介しておこう。

河上ははじめにこういっている。

「先達て山口の高等商業学校の十周年がありましたので之は私の母校でありますから……母校といっても之は高等学校でありますが……其所へ往って講演をしました。其演説の題は『血と手』と云ふ題でありましたが、その前半の「血」の方は先達て大学の方の経済会で饒舌をしましたので今日は其後半の「手」の方を御話し仕て見やうと思ふのであります」。

山口での講演「血と手」の記録は『山口高等商業学校十周年記念講演集』(大正五年)におさめられているが、全集には内容が他と重複するというので収録されていない。京大での講演は、五月一六日第一九回経済学読書会でおこなった「人種問題」という報告で、その要旨は『京都法学会雑誌』一〇―六に発表され、全集第八巻の別篇に収録された。この「時局に対する国民の覚悟」も、「人種問題」と同様第八巻の別篇に収録されてしかるべきものであろう。

河上はこの講演後六月から七月にかけて大阪朝日新聞に「日本民族の血と手」という文章を連載し、後『祖国を顧みて』(大正四年一二月)に収録した(全集第八巻所収)。この文章は山口高校、京大経済学読書会、京都経済会での三つの講演の原稿をまとめたものであり、したがって「時局に対する国民の覚悟」の内容も、実質的には「日本民族の血と手」の中に吸収されているから、

とくに目あたらしいものはない。ただ講演記録の方は話し言葉で親しみやすい調子でのべられていて、河上の主張の底にある心情がよくうかがえるところがある。講演の最後のところを引用しておくことにしよう。

「思ふに欧羅巴は将さに是から疲弊しようとする時である。又た亜米利加などは英吉利、仏蘭西、独逸、伊太利、支那、日本と各国人との間の子の寄所である。あゝ云ふ所で本統の文明は出来るものではない、然うなると吾々日本人といふものは東西文明を双肩に荷なって行かなければならぬといふ時機になって居るので、恐らく今度の戦争の爲めに学問界に居る人も実業に居る人も、此機会に諸種の産業上の革命が出来るのであらう、種々の生活上の根本問題を解決研究するやうな事が出来るだらうと預期して居ることゝ存じますが、然ういふ事は本当に是非実現して貰いたいと希望して居る次第です、大変拙い話でありましたが是れで終りといたします」(拍手)。

四

大山家から早稲田大学現代政治経済研究所に寄贈された「大山郁夫関係資料」の中に、河上肇が大山にあてた書簡が何通かあるということを藤原保信教授からきいていたが、今回そのコピーが教授の御厚意で岩波書店の米浜泰英氏からとどけられた。全集には河上の大山あての手紙が一通(一九二八年二月、大山落選のことをしるす)だけおさめられている(第二五巻)だけであるが、今回発見されたもの四通は、いずれも一九二八年の七月と十月に京都の河上から東京の大山に出されたものである。

四通のうちの三通は流産した五社版『マルクス・エンゲルス全集』の残務處理に関するもので、三通のうち二通は受取人が大山郁夫、大内兵衛、櫛田民蔵の三名になっている。大山郁夫一人にあてた手紙で河上は、自分がうけるべき金のなかから金百円を新党準備会の方へ寄附したいと申し出ている。三名にあてた二通のうちの一通には、浅野晃による『哲学の貧困』の邦訳の謝礼の額のこと、『資本論』の第三巻の邦訳を担当することになっていた長谷部文雄に対する慰労金のことが書かれており、他の一通は、全集第一―三巻の訳者たちへの原稿料の配分案(他の人の執筆)に河上が朱筆でみじかいコメントをつけている。

興味ぶかいのはマルクス・エンゲルス全集に関するこれら三通の手紙よりも、それとは関係のない七月四日づけのものである。これは六月二七日づけの大山の手紙に

対する返事であるが河上はその中で、東京からの講演や講習会の依頼をすべて断ったが、それは大学をやめた自分は「今後聴衆の前に立つことはやめようと決心した」からであるといい、その理由は、自分は心臓や胃腸が弱くて、講義や講演が非常に重荷であったが、「今やっと大学を追はれて月給がなくなった代りに、講義の義務をも免れたので、私としては、ホッとしたような気持で、チョッと演説会へ出る気分になりません」とのべている。

演説会に出るということは、政治運動にコミットすることだが、もし許されるならと、河上はつぎのようにのべている。自分のような「体力が丙種以下の」「弱虫」は、「その方面を辞して」、「なんにしても、無産階級は理論を武器とすることを強要されてゐますから、その理論をみがく役目ー言はば砲兵工廠の仕事みたいなものーを微力ながら引受けてゆきたいと思ってゐるのです」。

河上はこのように自分の心境を吐露し、最後に、この手紙を細迫兼光に「お見せ下すっても私は差支ありません」と書いている。前の手紙に新党準備会に百円を寄附するとあったが、云わば実践に直接タッチしえぬ河上のせめてもの支援の気持なのであろう。

だが切迫した当時の政治状勢は、河上が書斎で研究生活をつづけることを許さなかった。彼がそうすることができたのは翌年一九二九年の末までで、一九三〇年一月には、大山とともに政治運動に参加すべく、京都をひきはらって、上京することになるのである。

＊＊＊＊＊＊＊

河上肇記念会会員出版・続

・曽我まり「歌集・文集　冬の木榴」（中に河上の短歌に触れた一稿あり　神戸市垂水区南多聞台六ー九ー九　定価二、五〇〇円）

・村中嘉明「昭和の暗黒物語ー私の貧乏物語戦前の部・私の貧乏物語ー戦後の部」（小松市古城町八五　定価一、四〇〇円・一、五〇〇円）

（事務局より、寄贈ありがとうございます。事務局で独占すべきものではないでしょうから、こういう形で紹介し、お礼といたします。御希望の方は上記住所へ連絡されるといかがかと存じます。なお、松本さん、村中さんの本は事務局に数部ありますのでご連絡下さい。）

特集・河上肇生誕百十周年記念 I

河上肇生誕百十周年記念行事記

紀平龍雄

一八七九年十月二十日、河上肇は山口県岩国に生まれた。今年で百十年になる。記念行事の企画は二・三年前から事務局で討議されてきたが、その一つが東京河上会・山口河上会との共催による記念講演会であった。折しも今年はその創設に河上も多大の尽力をした京都大学経済学部創設七十年にあたり、同経済学会との以上四者主催行事となった。十一月十一日、土曜日、場所は河上が何度も講義した京大法経第二講堂である。暖かいおだやかな秋の午後だった。

本日の集会で配布する資料は既に用意されているが、今朝起きて新聞を開くと「河上肇ってだれ？　生誕百十年記念講演会　京大生の反応さっぱり」という見出しの毎日の記事が目に入る。これも資料に加えるのがよかろうと大阪の職場へ印刷に出掛ける。このため十時半からの法然院での法要出席は諦めた。昼過ぎにバスを降りる。正門前付近の塀には半月ほど先に開かれる大学祭関係の看板が色彩豊かに隙間なくびっしりと並び、これだけでも十分に現代学生気質がうかがわれて面白い。そして正門脇にはこれらとは対象的に講演会の案内が墨書されている。土曜日の午後の構内は学生の姿もまばら。それに今年は京都の秋は遅れている、紅葉する樹木も少ない。

少し早いが会場に直行。事務局の一行はまだ法然院から戻られていない。あとから聞くと法然院下の湯豆腐屋で十数人で昼食をされた由。定刻は一時半、とすれば定刻一時間前の教室に既に四・五人が座しておられる。署名をお願いすると一番に「小田正大」と書かれた。午前の講義の名残りであろうか、難しい数式が黒板いっぱいに消されぬままに残されている。教室の性格からしても経済学関係の講義であろう、隔世の感がする。

少し準備を始めた一時前に細川先生等京大関係の方々

が来られ、また杉原先生や大門さん、その他事務局の連中も到着された。この頃から受付が賑わい始めた。「ああ懐かしい、〇〇年前と少しも変わらない」と天井を見上げる男性、「私など名前を書くほどの者ではありません」と受付名簿を遠慮される初老の婦人が何人もおられる。「今朝の新聞で見ました、私でも聞かせてもらえますか」と問われる人、それに若い人や学生らしい姿も目につく。事務局の予想では本日の来場予定者は多くて百人、資料は予備を見て百二十部あれば十分であろうとされていた。私は更に安全を見こんで百五十部用意した。ところがまず池上先生の資料が切れて、開会の頃には他の資料もすべてなくなった。事務局の悲観的観測およびマスコミ威力過少評価が露呈される。また京大構内の各種案内や掲示物の効果もあろう。すべて嬉しい誤算である。こういう経過で受付名簿には百八十人、それに混雑時にそのまま入場された方もおられて総参加者は二百人を越したと思われる。

講演会の模様は次号で紹介されるので演題のみ紹介します。

開会の辞　河上肇記念会世話人代表　杉原　四郎氏

河上肇生誕百十周年と京大経済学部七十周年によせて　京都大学経済学部長　尾崎　芳治氏

いま『貧乏物語』を読む　京都大学経済学部教授　池上　惇氏

河上肇〜その生と死の葛藤〜　立教大学経済学部教授　住谷　一彦氏

閉会の辞　河上肇記念会事務局代表　大門英太郎氏

尾崎先生の熱演で時間が大幅に延長、その後の講師先生にはやや短縮をお願いしたが、それでも終了は五時半。秋の夕暮れは早く、陽はすっかり落ちていた。

直ちに会場を近くの楽友会館に移して祝賀会。東京から、九州から、四国からも参加されて出席者約三十人（出世者名簿は別掲）。河上肇記念会世話人代表杉原四郎先生、東京河上会脇村義太郎先生、京都大学経済学部長尾崎芳治先生の挨拶の後、東京河上会生沼曹喜先生の乾杯の音頭でビールが入った。せっかく遠方からも出席されているので全員が自己紹介も兼ねて一言ずつ語る賑やかな祝賀会となった。河上肇御息女羽村シズ氏の挨拶もあって、最後は大門事務局長から「生誕百十年記念行事はこれで終わったのではありません。実はこの記念の年に河上肇賞を企画しています。細案が出来次第連絡し

ますので、その折は御協力お願いします。本日は誠にありがとうございました。」の言葉で終会となった。午後八時過ぎである。会場を出るとすっかり夜で、少し寒いほどであった。

記念パーティー出席者（二十九名）

飯沼辰雄・池上　惇・井田絢子・内田穣吉・生沼曹喜・大門英太郎・岡村孝雄・沖本　彰・尾崎芳治・北原　邁・紀平龍雄・小泉参次・小嶋康生・佐田季男・杉原四郎・杉原　薫・住谷一彦・中谷武雄・長砂　実・羽村シズ・林　辰彦・林　通子・細川元雄・増田　孝・宮本雪男・山田一美・吉信粛・脇村義太郎・渡辺　尚

（追記）記念講演会を機会に八名の方が河上肇記念会入会されました（十二月中旬現在）、嬉しいことです。

なお講演会の時にアンケートをお願いしました。その集計を次号に報告します。

ひと　ひと

谷一彦さんらの講演に耳を傾けた。

講演会後の記念パーティーで脇村さんは、三高時代の河上博士との出会い、進路指導を受けて性格判断から東大行きを勧められたこと、東大時代、京大へ行き何カ月も博士の講演を聞いたことなど、尽きぬ思い出を〝独演〟。「京大に入り、河上先生に従ったとしたら、人生はどうなったかなと今でも思っている」と恩師を追憶した。河上博士の長女、羽村静子さん＝写真中＝らにも丁重にあいさつする姿は、とても来月八十九歳になるとはみえぬかくしゃくたるもの。「河上の水は絶えませんね」と盛会に満足げだった。

紅萌ゆる校庭に河上の水絶えず

経済学者・河上肇生誕百十年、京大経済学部創立七十年の記念講演会が、このほど京大であり、全国から二百人を超す経済学者や河上ファンが詰め掛けた。日本学士院院長、脇村義太郎さん（八）＝写真左＝も、わざわざ東京から駆け付け、最前列の机で京大教授の池上惇さん、立教大教授の住

1989. 11. 21（火）毎日（夕）

会員通信

（八九年八月―十一月）

・十一月十一日、河上先生生誕百十周年記念講演会の新聞を見ますの遅れまして、京大に御電話して其折のパンフ等を送って頂きました。兄が昭和五年か六年に京大法科卒業、兄から聞いた事があるのか、又主人の本棚にあったのか数十年前に「遠くでかすかに鐘が鳴る」を読みました様に思いますが、最近大阪弁護士故菅原昌人氏の文を読み、又河上先生の本を読みたくなりました。いつの間にか家にはなくなってしまい、梅田の古本屋でやっと捜して再び読みました。貧乏物語は芦屋の図書館で借りて読みました。私でも御仲間に入れて頂けるか、一寸年を取り過ぎて居りますが宜敷く御願い致します。

（芦屋市　志賀　節子）

・（新入会）河上先生については何も知りませんので宜しく御指導の程、お願い申し上げます。

（八尾市　青木　吉忠）

・会費納入期（機会）をうかがっておりました。おそくなりましたがお届けします。ただ今年は会報の発行機会がへったのでしょうか。例年はもう少しその機会があったように思いますが。この会は単なる旧友や……の集まりでないのですから。

（滋賀県今津町　前川　文夫）

・先日河上会に入会させて頂いた鈴木でございます。実は私は河上先生の御弟子であります石川興二先生の経済思想について研究いたしております。会報を拝読いたしました。いずれも興味深いお話に大いに学ばせて頂きました。また杉原四郎先生につきましては学生時代から深く学ばせて頂いておりますので親近感を持つことができました。私も「自叙伝」を読み感動いたしましたが、今年岩波の文庫として復刊されるのを楽しみにいたしております。（中略）同封の河上先生のカットはもし御迷惑でありませんでしたら、何かお使い下さい。（九ページ掲載）

（紀平龍雄宛）

名古屋市　鈴木　一典）

・会報三二号の二三ページに「一言」を載せていただきましたが、一八行目の弁護士さんは浜口先生でなく田万清臣先生です。

（堺市　広岡　正次）

・当方馬齢に反むき先月下旬の松川事件四十周年記念集会と埼玉での第三回全国高齢者大会に参加予定が事情があって残念乍ら参加できませんでした。次に記念会会報のことでございます一月以来未発行になっておりますがその旨御一報頂ければ幸いと存じ、お伺い申し上げました。

（紀平龍雄宛　豊栄市　有田惣三郎）

・（前略）この拙著は私がこの夏、友人たちの応援を頂いて出したもので、内に河上先生の詩を一つ、ひかせて頂いたところあり、お恥ずかしながらごらんに入れます。

（大門英太郎宛　神戸市　曽我　まり）

以下は十一月十一日生誕百十周年記念事業の出欠表によせられた欠席者（講演会のみ出席者を含む）の通信を掲載させていただきました。（各節五十音順）

一

今年も欠席致します。秋の法然院のこと、折にふれて思い出します。会には参加出来ませんが、京都、大阪近辺に出張の折は必ずといっていい程、河上博士の墓前に出かけています。そこは、私自身を少しでも「まともな」生き方の出来るようにしてくれる道場の一つと考えておりますが……

福岡市　阿波　保喬

秋深く法然院の墓前にぬかずきたい思いで一杯ですが、新設の九州国際大学に勤めることとなり、公用のため失礼申し上げます。

福岡市　伊東　勇夫

御案内誠に有難う御座居ました。当方の日程の都合にて墓前祭等に参加出来ないのは残念ですが、何れ近く老妻ともどもお参りするつもりです。記念諸行事の御成功を願っています。

熊本市　井上　栄次

長岡市には五十年前に二十七才の若さで獄死した遠藤元治という革命家がおります。京大の河上博士の講義をききたいと、英語の辞書を一頁ずつ暗記して呑みこんでしまうという猛勉強をして三高に入りました。軍事教練反対のストライキなどを指導し、退学処分になりました。十月十五日に「偲ぶ会」がもたれました。同じ日に私は「治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟」の全国婦人集会に

参加し、心に深く期するところがありました。

長岡市　大塚　君子

音読会主催の「岩国ツアー」に、おおぜいおいで下さるように期待しております。一一〇周年記念行事には出席したいところですが、失礼させていただきます。皆様によろしくおつたえ下さい。

岩国市　河上　荘吾

大学の河上祭はどのようになっておりますか。若い人達に河上先生はどのように映っているのでしょうか。当日は仕事の関係で、出席できなくなるかもしれませんが、一応、久しぶりに大学に行きたいと思っています。

京都市　岸本　正美

幹事の皆様には、大変お世話様です。国の内外にて、様々な動きがあり、マルクス学説に対する批判が色々な方面からあります。特にソ連、中国、東欧諸国の変貌が各方面に波紋を拡げているようです。この様なときこそ河上先生の学問と人格とが益々尊重されるのではないでしょうか。そう云う意味あいで河上会の発展を心から願う者の一人です。よろしくお願いいたします。

豊中市　後藤　嘉七

十一月六日～十四日まで、イタリア年金者組合との交流にゆくので残念ながら欠席にします。今後ともよろしく。

宇治市　佐藤　武義

昨一〇月二六日夜、東京学士会館で、住谷（一彦）、平田（清明）、古田（光）、塩田（庄兵衛）の「戦後世代から見た河上肇」シンポジウムをやらせていただきました。

東京都文京区　塩田庄兵衛

残念ながら和歌山に行ってます。

向日市　寿岳　章子

御案内をありがとうございました。当日同時刻に大阪で「どうなるどうする天皇制」という集会があり、それに参加することになっておりますので失礼いたします。御盛会をお祈りいたします。

宝塚市　竹田　幸子

落葉のふりそそぐ法然院を偲んでいます。

小野田市　谷口　年男

御通知心から御礼申し上げます。

会報の河上先生におけるキリスト教の問題、私にとっても問題意識のなかにあり、住谷一彦さん（キリスト者）の河上論をうかがえるのは大変うれしく期待しています。

京都市　永岡　薫

御盛会をお祈り申し上げます。参列出来ず誠に残念でございます。十月十六日は逸見重雄の十三回忌でございました。

心機一転は河上先生みあと追ひ荊棘の道ましぐらに行きし

藤沢市　逸見千鶴子

遠距離通勤しており、公務多忙の折、折角の機会ですが、（河上生家訪問など）とても出席できそうにありません。退職後また独自にゆっくりやる他なかろうと思っています。

滋賀県高島郡　前川　文夫

満九十二才で、悠悠自適生活やっています。

徳島市　三村　文一

いつも御案内感謝します。マルクス思想をマルクス主義と称して、イデオロギー化させたのはスターリン主義の重大な犯罪行為です。しかし、反スターリン主義と称しても、その大半は政治主義と小児病、ブルジョワ急進主義、構造改革、教条主義と、聞くに耐えないものです。河上肇博士を今日的に批判的に求めれば、こうした化石化したマルクス主義を粉砕出来ると確信します。

摂津市　三輪　三雄

農繁のため、欠席いたします。御盛会を御祈念申し上げます。

長野県北佐久郡　両角　康則

御無沙汰申訳ありません。この処独文学会の全国大会を大阪で主宰し、行事続きで疲労気味です。昨秋三ヵ月は上海に滞在中で、失礼しました。来春迄にゲーテ「ファウスト」の訳業を何とか仕上げねばならないので苦労しており、御無沙汰がちのこと、悪しからず御諒承下さい。追伸、関西大ではこの一ヵ月ドイツ左翼反ナチの高名な出版社「マリク書店」ライブラリー（図書館所蔵）の展示会を催し、その機に公開講演を私が担当（一〇月一三日）しました。和田洋一先生にこの目録を送り、お招きした処、懐かしい返信と同時に先生の講演所収の河上記念会報が届いた次第です。

吹田市　山下　肇

せっかくの御案内ですが、当日当県の地方の町議会選挙応援の日程あ

り、現職の悲しさで、つごうがつきかねます。心から御盛会をお祈り申し上げます。

盛岡市　横田　綾二

地方の限られた地で仕事をするとき、最も大切な読書による視野の広がりは欠かせないものです。河上先生の著作もその一つとして学んでおります。会には出席できませんが、情勢を切り開く確かなものと確信するものです。「会報」の継続送付にお礼申し上げます。

福島市　吉田千代子

二

身体が弱りまして三ヶ月余入院して居りました。たゞいまは家できままに過して居ります。皆々様の御健康を願って居ります。

池田市　相沢　実子

岩国での墓前祭にも近いので赴きたいと思いながら臆怯なのも年令の勢でしょうか。大門英太郎氏にも逢いたいが。統計教育六〇年を京大経済学部七十年史（『人が語る経済学部の七十年』）に寄稿した拙稿を御覧願います。尾崎学部長の講演に期待しながら……手紙のみの出席通知にします。

広島市　青盛　和雄

河上先生の記念総会御通知いただきますが、長らく心臓障害のためペースメーカーの医学の力をかりて命をつないでおりますので、歩行困難のため一歩も外出は出来ません御了承下さい。

奈良市　伊瀬幸太郎

私事、健康が勝れず遠出が出来なくなりましたので、残念ながら欠席致します。各会の御盛会を祈ります。

西宮市　石井　公代

健康上の理由のため。ご盛会をお祈りしています。

京都市　岡部　利良

秋の季節になり体調をくずしていますので遠出をさしひかえていますので出席できません。

東京都練馬区　金子　楽

病後、静養中につき、あしからず御了承下さい。

東京都文京区　金原　四郎

九月に入院、十月に手術を受けました。参加予定でしたが、回復不十分ですので参加できないのが残念です。河上肇生誕百十年記念会が盛会であります様、お祈り申し上げます。

長崎市　川原　竹一

入院中です。

岡山市　岸本　竹志

目下入院加療中で、残念ですが出席いたし兼ねます。御了承の程御願い申し上げます。

藤沢市　小池　基之

腰痛のため、こゝ二、三回欠席いたしましたが、だいぶん恢復してきましたので来年を楽しみにしております。共産圏で共産主義の放棄が進んでいますが、河上先生の「義を重んずる」松陰から承け継いだ思想は永遠です。

国分寺市　佐藤　克巳

以前何年か東京河上会の事務所として小生の事務所を使ってきて貰ったが、数年前から体調不調となり、いらい何の御面倒も見られず、また会合に出席することもできなくなりました。悪しからず。

東京都杉並区　高木　右門

眼も見えず、体も弱っておりますので、残念乍ら欠席よりありません。

東京都杉並区　高島　善哉

療養中のため。

京都市　田中真三郎

病気で療養のため欠席させていたゞきます。

岸和田市　田辺　平

年来体調すぐれず、いずれも欠席させていただきます。匆々

枚方市　長生　俊良

老齢のため遠出を差控えていますので失礼いたします。

東京都文京区　布川角左衛門

脳梗塞の為に倒れ、現在やっとリハビリ中につき、残念乍ら参加出来ず。

舞鶴市　野添　訓吉

健康を少々害ひ遠出を遠慮して居ります。盛会を祈って居ります。匆々

藤岡市　荻原　俊

いつもお世話様になっております。退院間もなくの「体力」が旅行に堪えられそうもありませんので出席は今年は断念です。右不悪

長野県南安曇郡　平井　重男

オペ前後になるので、出席は不可能であります。

河内長野市　藤木福太郎

目下心不全のため旅行を医師からとめられて居り、残念ながら欠席致します。来年は何とか出かけたいと思います。

藤沢市　前田　愛人

ご連絡有難うございました。つきましては私儀最近腰、足部の痛みを感じ、旅行困難のため、残念ですが参会出来ませんご諒承下さい。

井原市　真砂　一之

入院中なので、欠席いたします。会の成功を祈り上げます。

門真市　水原　肇

昨秋の経済学部七〇周年記念経済学会大会には楽しく出席いたしましたが、本秋は折角の好企画による催しに参加できず大変残念ですが、療養につとめ、再起を期しております。

萩市　脇　英夫

＊＊＊＊＊＊＊

編集後記

一九九〇年を迎え、会員諸氏の御健康と御活躍とを祈願し、今年もよろしくお願い申し上げます。

昨年一一月の生誕百十周年記念行事には多数の方々の参加をえて、成功裡におわったこと、事務局担当の一人として大へん喜んでおります。

この生誕百十周年記念に寄せられた論稿が、日本経済新聞の「春秋」欄をはじめ、毎日新聞、京都新聞の「文化」欄に載せられました。また近く池上先生の講演内容が新聞紙上に連載されると聞きおよんでおります。

次号は、これらの紹介を入れ、講演会の記録、参加者のアンケート集計を内容として刊行する予定です。昨年中に本号の発行をと声援を受けましたが、年を越してしまいましたことおわびいたします。本会報の季刊定着に努めたいと編集子の抱負を書いておきます。

なお、会員諸氏のご論稿、ご通信をよせていただくため、刊行予定月を記しておきます。三五号（四月初旬）、三六号（八月中旬）、三七号（一一月下旬）。

（細川　記）

入会のすすめ

河上肇記念会は、関西を中心として正式に発足して満十五年になります。毎年秋には、河上の墓前に集まり、法然院にて法要を営み、会の総会を開いております。会員の資格は会則にある通り、河上先生に学び、先生を知ろうとする人びとです。是非ご入会をおすすめします。

会員の皆さまには友人、知人にこの会をご紹介下さい。

会報(回覧雑誌)

転居通知のお願い

転居、住居表示変更などのあった場合は事務局へご一報下さい。

〒五四二　大阪市南区島ノ内一―二〇―一九
(丸善石油ビル)　千代田商事株式会社内
河上肇記念会

貧乏物語　初版

〒 542
大阪市南区島ノ内一―二〇―一九(丸善石油ビル)
千代田商事内　河上肇記念会
電話　(〇六)二五二―三六九六
振替口座　大阪　三一三一九五